



札幌ライラック病院はダイケア併設。地域のお年寄りとご家族にとって身近な病院です



HOSPITAL × ART

活動がスタートしました。「びょういんあーとぶろじえくと」の



病院をキャンパスに描く 命の軌跡

「びょういんあーとぶろじえくと」

特集 医療×アートの可能性

HOSPITAL × ART

近年はホスピタルアートへの認知が高まり、道内でも導入を進める病院やクリニックが増えつつあります。こうした中、10年前から札幌ライラック病院と連携して医療とアートのコラボレーションに取り組む「びょういんあーとぶろじえくと」は道内のホスピタルアートの先駆的存在です。患部に手を当てる「手当て」は医療の原点。ホスピタルアートは患者さんの心に手を当てる「観る手当て」と言えるものかもしれません。

医療とアート。
響き合うふたつの力

病院の壁に生まれた アートの花園

札幌市豊平区にある「札幌ライラック病院」。エントランスに足を踏み入れた瞬間、思わず「わあ！」と声を上げてしまいました。受付や待合ロビーの壁に色とりどりの花々が集まってハートを描き、風に乗って舞い上がる。匂い立つような色彩に魅せられたかのように蝶の群れが乱舞し、花の上や柱の陰で羽を休め、廊下の奥へと飛んでいく。

実はこれ、アーティスト・日野間尋子さんが代表を務める「びょういんあーとぶろじえくと」がプロデュースしたアートワーク『光の天使と出会う』。幾重にも花びらが重なるタンポポやマーガレット、いきいきと羽を広げる蝶たち、1000個に及ぶ作品のすべてが紙でできているんです。離れて眺めると童話の1シーンのような風景に笑みこぼれ、間近で見るとその鮮やかな色彩と精巧なつくりのために息がもれ、ここが病院であることをしばし忘れてしまいそうです。

ホスピタルアートの 感動を伝えたい

医療とアート。一見異なるふたつのジャンルを結びつける「ホスピタルアート」に日野間さんが出会ったのは2004年、オーストリアでギャラリーを併設する病院を訪れたのがきっかけでした。「病気の不安がつかまとう場にも関わらず、誰もが穏やかな表情でアートを楽しんでいる姿に感動しました。物をつくる人間は何らかの傷や欠落感を持ち、克服するために創造活動に打ち込んでいる部分が少なくありません。アーティストにとって描くことは生きること。医療の現場も生きること日々向き合ってお

り、医療とアートは響き合うものがあるように感じました」と日野間さん。帰国後に医療とアートを結びつける道を模索する中、縁あって知り合った札幌ライラック病院の前院長が日野間さんの思いに理解を示してくれたことから、2008年より「びょういんあーとぶろじえくと」の



近年は人工呼吸器を使用する患者さんや人工透析の患者さん、神経難病等により全介助を必要とする患者さんなども積極的に受け入れています。「びょういんあーとぷろじえくと」がスタートしたのは、こうした長期入院治療が必要な患者さんが増え始めた時期でした。

「患者さん自身が直接作品を観ることができなくても、ご家族や職員のみなさんが『こんな作品があったよ』『きれいだね』と患者さんに話しかけることで表情がやわらぐことがある。そんな患者さんの姿を見てご家族や職員のみなさんが笑い合う。アートを介してコミュニケーションが生まれ、笑顔が伝播していくことに意義があるのではないかと思います」と日野間さんは語ります。

企画を担当する同病院地域連携部主任・高田麻実さんも「明るい色が目に入ると患者さんはもちろん職員の気持ちも上向きになるんです。展示会が終了して作品を撤去



命が共振し、
生きている瞬間を
分かち合う

病院に関わる人々の
思いを作品に託して

当時の日本ではホスピタルアートの認知度が低く、どこかの病院でもせいぜい油絵が1〜2枚飾られている程度。殺風景な待合室でうつむいて診察を待っている患者さんの姿も珍しくありませんでした。「ただ絵を展示するだけでは今までの病院と変わらない。患者さんやご家族、職員の方々にご協力を願い、この病院ならではの特色や人々の思いを反映した作品をつくりたかったんです」と日野間さん。考えた末、自分の作品とともに障がい者支援施設の利用者の方々が描いた作品を取り入れたアートワークを行いました。当初は2週間の展示予定でしたが「終わると寂しくなるから延長してほしい」との声が。それから協力してくれるアーティスト仲間も増えていき、札幌ライラック病院での「びょういんあーとぷろじえくと」は今年で10

年目、通算12回目を迎えました。

一つひとつが一人
ひとりの存在そのもの

回を重ねても「いろいろな立場の方にご参加いただき、みんなでつくる」というコンセプトは変わりません。今回のアートワーク「光の天使と出会う」に参加したメンバーは100名以上。アーティストによるディレクションと他病院のボランティアスタッフなどによるサポートのもと、札幌ライラック病院のデイケアに通うお年寄りが撮るハサミから可憐な花々が咲き、障がい者支援施設の方々が描いたカラフルな絵から切り絵の蝶が羽ばたいていきました。「私にとって一つひとつの花や蝶は一人ひとりの存在そのもの。障がいの有無や年齢、立場の違いを超え、参加してくださいました方々とアーティストが対等な関係でつくり上げた作品だからこそ、観る人々の心に響くものがあると思っています」。

病院というある種の閉ざされた空間で、患者さんは日々病と戦っています。その人の痛みや苦しみを他者が共有す

ることは難しいかもしれませんが、アートを介して美しいと思う気持ちを共有することで「生きている瞬間」を分かち合うことができるはず。アートを目にする患者さんやご家族、職員、そして作り手として参加した人々、誰もが等しく命ある存在であり、喜びや感動をもたらす天使は一人ひとりの中に棲んでいるに違いありません。

ホスピタルアートから
広がる笑顔の輪

コミュニケーションを
創造するアートの力

札幌ライラック病院は1985年開院。もともと高齢の患者さんが大半を占める療養型の病院でしたが、医療制度改革の流れを踏まえ、



「びょういんあーとぷろじえくと」の仲間たち

すると寂しくて、アートの力を改めて感じます」と微笑みます。長期入院の方が多い同病院では、プロジェクトの歩みをつぶさに見てきた患者さんやご家族も少なくありません。「今回はいいね」「ちょっと派手かも」などと毎回感想を寄せていただき、関心の高さを感じます。地域にお住まいの方々も足を運んでくださり、楽しみにしていただいているようです。アートを通じて地域に貢献できれば、当院としてうれしい限りです」。

活動継続のために
克服すべき課題も

札幌ライラック病院の事例から「びょういんあーとぷろじえくと」に興味を持つ病院も増えてくるようですが、課題も少なくありません。「びょういんあーとぷろ

じえくと」は原則的にボランティア活動のため、参加アーティストはみな自費で現場に向いて作業を行っています。「札幌ライラック病院では予算を組んでいただいているので交通費などをお支払いできますが、『ボランティアだから無償で当たり前』と言われることも多いです。また、参加アーティストはプロの作家ですから、お預かりする作品は時として数百万円にも及ぶ価値があるもの。作家と作品を守るのも私の大切な仕事。今後は保険加入等何らかの対策を考えなければいけません」と日野間さん。

ボランティアとはいえ、活動を継続するためには経費がかかります。ホスピタルアートが良い形で機能していくためには、医療機関とアーティストが相互に理解を深め、信頼関係を築いていくことが不可欠と言えます。

お見送りの場にも、
アートの癒しの力を

「すでに来期の企画も構想中」という日野間さんが注目しているのは、職員通用口や霊安室周辺のアートワーク。「仕事を終えて帰る職員

のみなさんの疲れを癒し、長い人生を終えて旅立たれる方々をアートで温かくお見送りできたら。今後は緩和ケアやホスピスの先生方にもアドバイスをいただきながら、じっくりと構想を練っていきたいですね」。

ホスピタルアート。それは病院をキャンバスに描かれた命の軌跡。すべての人が生きることと真摯に向き合う場所で、命を吹き込まれたアートがいきいきと輝いています。

●びょういんあーとぷろじえくと
ホームページ <http://www.hinoma.com/hospitalart/>
メール hospitium@hinoma.com
facebook www.facebook.com/Byouinatopurojekuto

●医療法人北志会 札幌ライラック病院
札幌市豊平区豊平6条8丁目2-18
TEL.011-812-8822
ホームページ <http://www.lilac.or.jp/>

（お問い合わせ先）